

聖書宣教会通信

東京都羽村市羽西 2-9-3 Tel:042(554)1710 Fax:042(554)5562 www.bibleseminary.jp 振替 00150-6-34971

巻頭言 「みことばと賛美」

岳藤 照子

天は神の栄光を語り告げ、
大空は御手のわざを告げ知らせる。詩篇 19 篇

9 月下旬、巻頭言の依頼を頂き、怖れ迷いながら戸惑いつつ、これまでの主のみわざを感謝して、あかしさせていただきます。

●シュッツ、バッハのモテットとの出会い

学生時代、牧師を通じて茨城県のある教会を訪ねる機会が与えられました。そのときに、音楽にも造詣の深い宣教師が、大切な何枚かの SPレコードから数曲を聴かせてくださったのです。その中にシュッツのモテット、バッハのモテットがありました。夢中で聴きました。

特にシュッツの詩篇 19 篇は、神の創造のみ業を歌う衝撃的な合唱曲でした。作曲者がここまで聖書を歌うとは！！地方の田舎者の自分には正直言って、全く思い掛けない経験でした。

音楽修辞法、ベネチアでの“語り”の形式(G. ガブリエリ)から学んだ作曲法等、あらゆる手法を駆使した合唱を通して聖書の言葉が明解に伝わって来ました。この出会いが、私にとっての教会音楽のスタートだったと思います。社会的な困難や難しい環境の中で、信仰にある作曲家が、全ての者に共通の音楽というものを通じて、みことばを宣教した姿を見たような気がしました。

神様から与えられた音楽を用いて、今日、様々な集会が持たれており、音楽のジャンルも様々ですが、「みことばを土台にした賛美が歌われること」を、心に留めたく思います。みことばを基としていることが、今日も、またこれからも、祝福の源になると思います。

●宣教会での奉仕

主人の故豪希が先生方と教会音楽舎を立ち上げた時から、私の宣教会での奉仕は始まりました。最初は身の回りの雑事や、基礎的な部分をマスター出来ない生徒のケアが私の主な務めでしたが、主人の晩年、長く闘病生活が続く中で私の負担も増えて行きました。振り返ると、若い研修生の皆さんに励まされながら、何もお役に立てなかつた、との思いで力不足を痛感しています。

●みことばと賛美

昔、教会音楽学校(エスリンゲン)で学んでいた時、舟喜順一先生が遠路はるばる訪ねて下さいました。丁度ミッションのご奉仕があり、リーベンツェラにいらした時でした。



賛美の大切な部分についてのアドバイスを頂きました。「知性と感性、つまり全人格での賛美の姿勢です。神学と音楽の両面を神からのものと受け止めて、これからも励むように」とのお勧めでした。コロサイ 3:16、エペソ 5:19 に書かれているみことばの実行のためにもしっかりと聖書を学ぶこと。歌う者、また奏する者は、その内容をみことばの裏付けをもって理解し、その上で音楽的にも成長し、そうして整えられた賛美がささげられるように、とのことでした。

「聖霊の働きによって神に向かって賛美出来る幸いを忘れないように」と結ばれた言葉は強く印象に残っています。

当時ははっきりしませんでした。今日、再確認させられ、まさにその通りと実感しています。罪赦され、永遠のいのちに生きる者として、また使命を受けた者として歩みたく願います。

私には今後の術を知りませんが、若い先生方に託します。教会に一致を与える主のみわざの中で、ともに賛美して行きましょう。

宣教会が、福音の信仰を堅持して聖書を学ぶ、神学的、実践的にも整えられたバランスのとれた神学校として、これからも主に在って用いられますようにと、切に祈る者です。

先生方、祈ってくれた研修生に、ここで感謝を表明したいと思います。

「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。」(コロサイ 3:16)

……………<リトリートから>……………

毎年の秋期調整期間中に行われるリトリートは、研修生と教師たちにとって、学びの日常を離れて交わりを深める大切なときです。家族寮での歩みを共にしている家族にも、良い交わりの機会ともなっています。研修生の担当者たちの奉仕で、10月22日と23日に、国立女性教育会館を会場に、デボーションをテーマにして学び、分かち合うプログラムが立てられました。そこで鞭木校長が講演した2回の講演の内容を、極めて限られた字数になりますが、要約していただき、読者の皆さまにお分かちします。また研修生のあかしをお届けします。

<講演の要約>

鞭木 由行

デボーションはいつの時代にもクリスチャンにとって大きな課題でした。とりわけ牧師にとっては死活問題です。今回このようなテーマを取り上げてくださったことに感謝します。講演の依頼を受けたとき、あまり迷わずに引き受けましたが、結構準備に時間が取られました。今晩はデボーションについて、明日は自己吟味を中心にお話しをいたします。

私のデボーションの起源には二つのことがあります。一つは45年前、洗礼準備クラスで用いられた書物『道しるべ』です。この第2章は「祈り」、第3章は「聖書の読み方」についてです。

私も牧会で洗礼準備クラスを持つときは、いつもこの二章を用いてきました。もう一つの起源となっていることは、羽鳥明先生が卒業式の時であったと思いますが、「一日2時間祈りなさい」と説教されたことでした。それ以後、これが私の課題となったのです。

私たちは、いつデボーションを持つでしょうか。多くの場合早朝が一番良いときです。なぜなら一日の諸々のことが頭の中に入り込む前に、みことばに向かうことができるからです。しかし、朝だけで勿論終わりません。旧約聖書の時代、朝夕二回いけにえがささげられたように（例えば1歴16:40）、私たちも夕方にもう一度時間を取り分けることは大切です。夜でも良いのですが、夜はどうしても眠くなりますので、一日の仕事が終わった時、できれば夕食の前、あるいは夕食直後に持つのが良いでしょう。私は救われた時、早朝の新聞配達をしていました。それでも教えられた通り、朝一番に、つまり夜中の3時半頃に起きて、デボーションを持つようにしていましたが、長続きしませんでした。その後

教えられたことは、イスラエル人が、最良の動物をいけにえとしたように、私たちも一日の最良の時間を用いるべきであるということでした。

自分にとって最良の時間を考えて、デボーションを持つことになりました。

時間は頻度の問題でもあります。一日に三度、デボーションを持つのは良いことだと思います。ダニエルは、その最良の模範です。「彼は、いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた。」また夜寝る前に感謝の祈りをささげないで床につくことはあり得ないでしょう。ですから合計四回となります。

この頻度の問題で、私は、ジョージ・ウィットフィールドの自己吟味表から教えられたことを思い起こします。彼は「毎時間短い祈りを捧げたかどうか」を自己吟味の項目に挙げていました。毎時間祈ることは、結局聖書の「絶えず祈る」ことへとつながることでしょう。それは何度も繰り返し命じられています。「絶えず祈りなさい。」（1テサロニケ5:17）「望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい。」（ローマ12:12、エペソ6:18）

さて、デボーションには、4つの要素があると思います。（1）祈りと賛美、（2）みことばから聞くこと、（3）霊的な書物を読むこと、そして、（4）自分を吟味することです。そのなかで、今朝は、自己吟味を取り上げたい。自己吟味とは、霊的健康を保つために自分の心の中を探ることです。自分と誠実に向き合うことです。これは自分を「さばく」のではなく、正しく識別するためです。律法的努力ではなく、救われているゆえの責任です。その聖書的基盤、あるいは重要性は、パウロの言葉に端的に現れています。

「あなたがたは、信仰に立っているかどうか、

自分自身をためし、また吟味しなさい。」(2コリント 13:5, 1コリント 11:28)、「力の限り、見張って、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれからわく。」(箴言 4:23, その他使徒 20:28, ガラテヤ 6:4-5) 私は、校長に就任以来このことを強調してきました。私たちが霊的偽善から逃れるためには、これは不可欠だと考えているからです。最後に、R. バクスターが教えている自己吟味の項目をご紹介します。

(1) 恵み(救い)によって生かされ、満たされ

ているか?他の人に救いの恵みを語りつつ、自分はそこから外れていないか?

(2) その恵みを生き生きとした働きの中で、保持しているか。人に説教する前にまず自分に説教せよ。

(3) 教理と行いが分離していないか?語ったことを行いで否定していないか?

(4) 貧しい人々を助けなさい。また主のために所有する以外のものを所有しないようにしなさい。

.....<リトリートのあかし>.....

本科3年 東海林 隆之

「それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。」

詩篇 90:12

アラームが鳴った。リトリート初日、講義の真っ最中である。発信源は誰だ。語っている鞭木師自身のモバイルであった。慌ててアラームを切り「祈りの時間がわかるように設定してあるんです」とそっと言われたことが、印象深かった。

「デボーション」がテーマの今回のリトリート。有志での雨中登山や「教師対抗聖書クイズ」等、特筆すべきは沢山あるのだが、やはり講義である。鞭木師の実体験を含めた、祈り、みことば、自己吟味の三要素からのデボーションの学びと、分かち合いの時。そこから「大切なものを大切にす姿勢」そして「自分に死ぬこと」について考えさせられた。

「効率化」や「マルチタスク」等の言葉を旗印に、人間が機械のように一定の速度で幾つかの物事を同時に処理できる、という幻想のもと進歩した技術が「一定の時間を一つの目的のためだけに取り分ける」ことの価値を低く思わせているように感じる。しかし与えられた時間が

限られているからこそ、その時間を積極的に過ごすために必要なのは、時間を取り分け、その時間に一つのラベルだけを張ることであり、その基本が「最も大切なものを最も大切に扱う姿勢としてのデボーション」であると思われた。

私たちは、自分で何でも選択でき、選んだ物はすぐに手に入ると思わせる社会の影響を受けている。その思想は神との交わりにおいても自分に選択権があると思わせ、さらに自己中心的な祈りへ、そして自己中心的な礼拝に繋がって行く。しかしデボーションの主権者は神ご自身であり、本来神の前に立つことも祈ることも出来ない私たちは御子の十字架と復活の故にその招きに応じてみことばと祈りの座に着く。それは自分に死ぬことの上に成り立ち、デボーションは自分に死に続けることの訓練なのだろう。

そこには自らの祈りの貧しさへの嘆きがあり、しかしみことばを通して祈りを教えてください。さる神の憐れみがある。自分勝手な要求をそつと脇へどけることを示され、その上で主の導きを受け取ることへの促しがある。

自分たちの日を正しく数える歩みをするために、第一のことを第一とし、自分に死ぬ訓練を受け続ける決断をすること。それがこのリトリートで迫られたことである。

編集後記

統計などありませんが、伝道者の健康課題を聞くことがさらに増えて来た気がしています。実りに対して少ない働き手(ルカ 10:2 等)が、肉体的にも霊的にも整えられた姿で収穫のために働くことができるように、

教会は熱心に祈りたいと思います。また具体的に支えたいと思います。さらに働き手が起こされるように祈りましょう。そうして御名があがめられますように。(A)